



七 おしっこ王子が塾に行く

塾にも王子と一緒にいった。でも、さっきみたいにしゃべらないように王子には頼んだ。「わかったよ。でも、うんこやおしっこを馬鹿にするような奴は絶対に許さないからね」
「ああ、僕も許さないよ」

僕は塾に行っている間、必要なこと以外は友達とできるだけしゃべらないようにした。塾の授業の間、王子は僕の胸ポケットから顔を出し、授業の風景を眺めていた。

「君たちも大変だな。学校で勉強して、塾でも勉強だなんて。遊ぶ暇がないじゃないか。それに、勉強するんだったら、数学や英語だけでなく、うんこやおしっこのことも勉強するべきだよ。だって、自分の体のことなんだよ。自分の体のことも知らないで、他のことを勉強しても意味がないじゃないか。順番が違うよ」

王子は僕だけに聞こえるように、ひとり言をしゃべった。

「王子はまだ帰って来ていないのか」

大王がリキッド班の隊長の下に現れる。

「すみません。まだです」

隊長は俯いた。

「いやあ。お前があやまることはない。もうすぐ夕食の時間だ。一日で最大の仕事なのに戻って来ないとは、王子にも困ったものだ。。お前たちだけで大丈夫か。人員は足りるのか」

「はい。ご心配なく」

「そうか。王子が夕食までに戻って来なかった場合には、申し訳ないが、王子の分もお前たちだけで頑張ってくれ。わしも手伝うからな」

「はい」

大王は夕食の消化活動に備えて、自分の持ち場に戻った。

「隊長。大王はなんとおっしゃっていましたか」

副隊長が近づいてきた。

「王子がいない分も頑張ってくれとのことだ」

「わかりました。もうすぐ夕食の時間です。早速、部下たちを集めて、早めに準備に取り掛かりましょう」

「そうだな。みんなを集めてくれ」

副隊長は隊長の下を去ると、部下たちに声を掛け始めた。隊長は夕食が流れてくる頭の上の暗い穴をじっと見つめていた。